



# 初雪に消えて



barukazu

初雪を見ると、私はどうしても逢のことを思い出してしまう。

ちらちらと、儚く舞うその様は、遠慮がちな彼女のように、それがまた私の心をキリキリと締めつけるのだ。

「ああ、会いたいな——」

本心が漏れる。

「逢……」

焼け跡の傍にしゃがみこむ。真っ黒に燃えた木は、しかし触れると驚くほど冷たかった。当然だ。こうしている私のコートの肩に、今年初めての雪が舞い落ちる季節なのだ。

ポケットから、持参した小さな木でできた箱を取り出した。そっと蓋を開けると、木の独特の香りを感じる。こんなに寒い場所でも木は力強いなと感じて、ほっとして思わず笑みがこぼれた。

この箱には何も入っていない。

蓋を開けたままの木の箱を、そっと地面に置いて、初雪が箱の中に詰まっていくのを待った。

「会いたいよ、逢……」

ああ、駄目だ。やはり私は初雪がどうしても苦手だ。自然と、自分が教師で逢が生徒だった頃を思い出してしまうから。

※

今日も自分の担当の授業を終え、職員室の自分の席に戻ってきた。

隣の教師がつけているラジオから、「今日は相当冷え込むため、初雪が降るかもしれない」という予報が聞こえた。

なるほど。窓の外を見ると、たしかにいつ雪が舞い落ちてきてもおかしくないくらいに、雲は鈍く色づいていて、辺りからは音が消えていた。逢の家は遠い。今から行けば、ちょうど初雪が降ってくれるかもしれない。

そんなことを考えながら机の上を整理して席を立ち、出欠ボードに自分の名前のネームプレート貼って、横にマジックで「直帰」と書き添えておいた。

今日は家庭訪問と偽って彼女と約束をしているのだ。

彼女の家は鬱蒼と茂った林に囲まれていて、近くに店もなく、夜になれば月の明かりしか頼るものがないくらい、いたるところに電灯がある昨今では珍しい場所にある家だった。

林の中を一人歩く。

踏みしめる足元にはすっかり枯れて落ちてしまった葉などが折り重なって、なんとも言えない哀愁を醸しだしていた。形だけの家庭訪問とはいえ、一応彼女のことを書いてある資料を持ってきた。彼女の家には、彼女一人しかいない。父親は仕事で海外に渡っている。母親は、彼女が小学生のときに亡くなったそうだ。とっくに分かっていることを何回も見直す。自分の彼女のことを全て知っておきたいと思うことは、誰にとっても同じだろう。

教師と生徒の恋愛。

道ならぬ恋。

この関係のことを知っている者はまだいない。完全に私達二人のなかだけで完結してしまっている関係。いつか明るみに出してしまう日が来るのだろう。ただ、そのときのことをまだ何も考えていない。むしろ考えたくない。どうせいつか辛くなる関係ならば、幸せなときは幸せを感じていたいのだ。

「先生」

聞きなれた恋しい人の声が聞こえた。いつのまにか林を抜けていたようだ。

「先生、遅いよ」

「ごめんな、逢。もう行くのかい」

制服姿にコートを羽織っただけで私の言葉に耳を傾ける、私よりもずいぶん小さいその姿も愛おしい。

「うん。今から向かうところ、今年が最後なの」

「そうか……。最後なのか」

彼女は毎年、初雪を小さな木の箱に集めている。

その理由を聞いたのはちょうど一年前。思えば、そのときは本当の家庭訪問で彼女の家を訪れたのだった。

※

「大丈夫か？」

すっかり熱くなってしまった額に乗せたタオルを取って、新しい冷たいものに取り替える。家庭訪問のために訪れた際、いくら呼び鈴を鳴らしても何の応答もなかったのを不思議に思い、ドアノブに手をかけて良かった。鍵はかかっておらず、すんなりと開いたドアの先に、玄関で倒れて荒い息を吐いている坂上を見つけたのだ。

苦しそうに息をする坂上を見ながら、かけられる言葉がほとんどないことを齒がゆく思った。なぜなら、私は坂上のことをとても気にしていたからだ。

教師という立場にありながら、このようなことを言うのは間違っていることはわかっている。けれど、彼女の手入れが行き届いた黒髪を見るたびに、こぢんまりとした守ってあげたくなる華奢な後ろ姿を見るたびに、そして周りの音をしんと張り詰めさせるような静かな雰囲気を感じるたびに、私の心はあまりにもせつなく軋むのだ。

とりあえず、ベッドに寝かせて、薬を飲ませたりなどのできる限りの介抱はしている。そのおかげなのか、辛さは少しずつ引いてきているようだった。

「水を替えてくる」

そう伝えるが、目を閉じたままの坂上からはなんの反応もなかった。

寝室を出て右に折れると、あまり生活感のないキッチンがあった。テーブルの上にはインスタント食品やリンゴなどのフルーツが置いてあるだけで、流しを見てみてもあまり使われているようには感じられない。高校生の一人暮らしでは当然とも言える光景だったが、そんな空間はいささか私を悲しくさせた。桶の水を流しに捨て、新しい水を張っている間に冷凍庫を開けて氷が入っていないかを確認しようとした。浮かべれば多少なりとは違うかもしれないと思ったからだ。

「なんだ？」

その冷凍庫で私は奇妙なものを見つけた。小さな木箱が九つ、きちんと並べられて置かれていたのだ。あまりにも不自然なその木箱が気になり、悪いとは思いつつ、私は中を確認していた。

中身は、雪だった。

真っ白で、柔らかそうな、雪だった。

おそらくは坂上が集めたものなのだろう。だが、なぜ雪などを。その答えはいくら頭を捻ってみても、さっぱり私にはわからなかった。

とりあえず、水を替えて寝室に戻ると、坂上は上半身を起こして窓の外を眺めていた。

「まだ横になっていなければ駄目だ」

薬の効果で一時的に良くなっているにすぎない。ここで無理をすれば、またふりだしだからだ。

「また雪が降りだしたんだ」

そんな私の気持ちなどお構いなしに、坂上は窓の外を見ながら独り言のように呟いた。そういえば、きのうは初雪が降った日だった。今日も同じくらい外が冷えているのだろう。その雪という単語で、私は先ほどの木箱のことを思い出した。

「坂上、あの冷凍庫の木箱はなんなんだ？ 中に雪が入っていたけれど」

今になって思えば、そのときに坂上がなぜ本当の理由を教えてくれたのかわからない。熱でボーっとしていたせいだったのかもしれない。ただ、彼女はゆっくりとその木箱が何であるかを語ってくれた。目線はもちろん窓の外に向けたままで。

その木箱は彼女の「母親との約束」であった。

彼女の母親は彼女がまだ小学生の頃に病気で亡くなっていた。その母親が病と闘っていた頃、病床であまりにも泣いて悲しむ彼女を見て母親が言ったのだ。

——毎年、初雪を木箱につめなさい。

その木箱が十箱になったなら、逢ちゃんのお願いごと、ひとつだけ神様が叶えてくれるから——

と。その年に母親は亡くなった。奇しくもそれは初雪の日だったという。彼女は亡き母親のことを思いながら一つ目の木箱に初雪をつめたそうだ。

その話を聞き終わると、私は坂上に聞いていた。

「坂上は、今何を願うんだ」

すると坂上は初めて窓から視線を外し、まっすぐに僕の目を見た。

射抜かれてしまうかと思うほど、鋭い目だった。でも、その目はどこか虚ろで、迷いが見えた

。

「私は……」

そう言ってから、一度、口を閉ざした。けれど、また口を開いて続けた。

「強くなりたい。もう、願いごとなんか頼らなくてもいいくらい、強くなりたいの」

その言葉は、まるで空気に消え入りそうなくらい小さな声で語られた。だけれども、私の心にはこれでもかというほど沁み込んできて、これまでただ単に「好きだ」と思っていた彼女のことを「愛しく」思えた。

そしてどうしようもない心の中の波に押し出されるように、私はベッドの上にいる彼女を抱きすくめた。自分で思っている以上に力が入ってしまっていることはわかっていたが、それを緩めることはできず、また彼女も全く抵抗することなどなく私を受け容れてくれていた。

こうして、私たちは道ならぬ恋の一步を踏み出したのだ。

※

「これで、十個目」

細かい作業をするにはどう見ても不便なくらい、ふっくらとした手袋に包まれた木箱には、初雪がちょこんとおさまっていた。

私たちは帰路についていた。最後の初雪は彼女の母親の墓前でとると二人で決めていたからだ。そこで私たちは初めて母親に付き合っていることを報告した。彼女はこれから家の冷凍庫を開け、この木箱を含めた計十個の木箱をテーブルに並べて願うのだろう。

その願い事が、私との将来を願うものにならなければ嬉しかったらどれだけ嬉しいだろうか。

「あっ」

そんなことを考えながら歩いていた私よりも、いつのまにか先を歩いていた逢が小さく声を上げた。

私もその声で彼女のしているほうに目を向けると、一筋の真っ黒な煙が空に向かって伸びているのが見えた。

それは紛れもなく、逢の家がある場所だった。

二人で走って家まで戻る。「勘違いであってほしい」、そう願いながら。

ただ、やはりそれは願いでしかなくて、逢の家は真っ赤になりながら物凄い勢いで燃えていた

。

二人でその様をただ眺めた。

私は、わけがわからなかった。悲しくもなかった。

ただ、わけがわからなかった。

そんな私の横で、逢は悲しそうとも、辛そうとも言いがたい、何かを感じ取ったような顔つきで、燃え朽ちる自分の家と向き合っていた。

そして、逢は小さく呟いた。

「これで、私はやっと強くなれるのかな」

その言葉の意味はあまりにも深すぎて私にはわからなかった。ただ理解するよりも感じ取って、逢が家を見ていられるように後ろに回ってから、そっと包み込むように、私は逢のことを抱きしめた。

逢は初めて抱きしめたときと同じように、なんの抵抗もしないで私を受け容れてくれた。そして私の手に、自分の手をそっと重ねてくれた。

その逢の手に、私ももう片方の手を重ねようとしたが、もうそこに逢はいなかった。逢は、もうどこにもいなかった。ただ、初雪の入っていない木箱がポツンと落ちていただけだった。